

地球市民として、難民問題を考えよう

3年 社会科 公民的分野

I 実践の目指しているもの

2015年は戦後70年ということで、平和について考えさせられる機会が多かった。特に原子爆弾が投下され、終戦を迎えた8月は報道などで、「平和」と「戦争」という2つの言葉をよく耳にした。また、いわゆるイスラム国が世界を震撼させ、日本国民の多くも脅威を感じる存在になってきた。さらに、近隣諸国との関係や安全保障条約の問題など、戦後70年が経った今、平和について真剣に考える必要がある。

今単元は「よりよい社会をめざして」ということで、持続可能な社会を形成するための学びが求められる。昨今の世界情勢を鑑みると、「平和」と「共生」について考えることが、持続可能な社会の形成につながると考えられる。不安による対立・排除と共生を求める理性的対応のせめぎ合いなど、持続可能な社会をつくる主体者としての判断が求められる。昨年末にかけて「難民」という言葉をよく耳にするようになった。世界には様々な理由で、自国で安全に生活することができない人々が多く存在する。難民の受け入れに関して、反対する声があるのも事実であり、対立が生まれている。“地球市民”として、全人類の共通の課題として、難民問題にどう向き合うか考えさせたい。

II 研究の内容

1 題材名（単元名）

「よりよい社会を目指して ～“地球市民”として難民問題を考えよう」

2 題材の目標（単元の目標）

「平和」と「共生」という観点から、持続可能な社会を形成していく“地球市民”の一人としての態度を養い、主体的に考察することができる。

3 題材の指導計画・単元構成など

3年間の社会科学習のまとめとして、特設授業として実施。

4 本時について

(1) 本時の目標

- ・“地球市民”の一人として、難民問題を通し、平和について考える態度を養う（関心・意欲・態度）
- ・支持・不支持の立場に立ち、難民が置かれている現状を考察することができる（思考・判断・表現）

(2) 本時の展開

●教師の働きかけ ○子どもの学習活動

《導入》 8分

- 難民の画像を数枚提示する。 → 「難民だ！」
- 難民の定義を確認する。 教科書 p213 「難民」
- クイズ形式で難民の基礎データを確認する。
 - ・世界中の難民の数 → 1,950 万人
 - ・全難民の約 51%が 18 歳未満
 - ・難民が最も発生している国 → シリア (388 万人)
 - ・難民受け入れが最も多い国 → トルコ (159 万人)

- ※ パワーポイントを活用し、生徒が難民の現状を即座に捉えられるようにする。
- ※ UNHCR 支援対象者は 5,950 万人

《展開 I》 22分

- 難民受け入れ支持、受け入れ反対デモの画像をそれぞれ提示する。

学習課題：“地球市民”として、難民問題をどのように考えたらよいのだろうか？

- 支持派、不支持派に二分し、4人グループをつくる。
- 支持派、不支持派それぞれの立場で理由を考えさせる。
- スローガンポスターを作成する。
- 支持派、不支持派を同じグループに編成し、4人グループをつくる。
- それぞれの立場で支持の理由、反対の理由を 45 秒以内で主張し合う。
- スローガンポスターを全体に共有する。

- ※ ヘイトスピーチにならないように、言葉を選ばせる。
- ※ 支持派2人、不支持派2人の計4人グループを作成する。

《展開 II》 13分

- 難民条約を提示する。
- 難民条約の意義を考える。
 - なぜ条約化されたのか4人グループで討議する。

- ※ 各グループに難民条約の条文プリントを配布（教師は条文を簡略化）

- 緒方貞子さんを紹介（p. p.）
- 緒方貞子さんのメッセージを動画で視聴する。

- ※ NHK スペシャルを教師が編集

《まとめ》 7分

- 2014年度の日本の受け入れ状況を確認する。

2014年度 5000人の申請に対し、許可したのは11人

- プリント記入、発表
- 教諭よりメッセージ

5 実践のポイント

【成 果】

- 立場を明らかにして考えさせることで、子どもたちの思考を促すことができた。
- スローガンポスター作成の場面では、小グループ内で活発なやりとりが行われていた。
- 緒方貞子さんのメッセージを動画で視聴することにより、難民が置かれている現状について、子どもたちの理解がより深まった。
- 既習事項を活用しながら、課題解決に向けて追究しており、3年間の積み重ねが生きた授業であった。

【課 題】

- 難民の現状を捉える際、クイズを行い、難民の人数などの数字を提示したが、数字の大きさを捉えやすいよう、工夫をすべきであった。
- 展開Ⅱの難民条約の意義を考えさせる場面で、発問が曖昧であった。「条約化」の意味を確認してから活動をさせるべきであった。